



## プチポワ独占インタビュー

# 指揮者 大野和士 さん

プロフィール：87年トスカニーニ国際指揮者コンクール優勝  
元モネ劇場音楽監督(2002年～2008年)  
新国立劇場オペラ部門芸術監督、東京都交響楽団音楽監督  
東京フィルハーモニー交響楽団桂冠指揮者  
2022年9月よりブリュッセルフィルハーモニー音楽監督に就任

お久しぶりです。モネ劇場で2008年までの6年間音楽監督でいらっしやった時には、プチポワにオペラ解説を掲載して頂きありがとうございました。9月から今度はブリュッセルフィルハーモニーオーケストラの音楽監督にご就任され、またモネオーケストラ創立250年記念コンサートでも指揮されるにあたって、ベルギー在住日本人へのメッセージをお聞かせください。

★前はモネ劇場音楽監督で主にオペラをなさり、今回は舞台・演出が無いコンサートの音楽監督ですが、オーケストラ(以下オケと省略)の指揮者として何か違いはありますか？またそれぞれの場合のオーケストラの特色を教えてください。

ブリュッセル・フィルハーモニーには、放送合唱団という専属の合唱団も存在しますので、声楽を伴う音楽も積極的に演奏していきたいと思います。また、演奏会場は、Flagey以外にもBozarでも演奏しますので、大きな編成の曲、合唱、ソロを伴う曲は自然とBozarになると思います。

ブリュッセル・フィルハーモニーの特徴は、そのように緻密なオケのみの合奏から、カテドラルの頂点を上り詰めるような壮大な音響の両方を持ち合わせていることかと思えます。モネのオケは、オペラの特質を反映したとても色彩的な音色や、流線的な響きの典雅さにあると思います。私もオペラの指揮を続けてきましたので、この点も特に重視して、ブリュッセル・フィルハーモニーとの響きの追求をしていきたいと思っています。

★オペラとオーケストラコンサートという両方の仕事を任されていらっしやいますが、東京とブリュッセル(欧州)で何か違いはありますか？

日本では東京だけで、8つのプロフェッショナルのオーケストラがあります。それぞれのオケが互いにしのぎを削っており、プログラムにも各々の特徴を出そうとしていますので、とても賑やかです。また、そこには自分の好きなオケに通い詰める方、いくつかのオケを聴き比べる方、と聴衆の質もいろいろな姿に分かれ

ています。

その点、ベルギーをはじめとするヨーロッパの主要都市には、それぞれ一つの代表的なオペラハウス、シンフォニーオーケストラ、放送局オーケストラがその役割をしっかりと果たしているのです、そんなに目移りのすることはないかもしれませんが、それでも、歌劇場のオケ、シンフォニーオケ、放送局オケにはそれぞれの味がありますので、やはり複数のオーケストラが競う関係にあるというのは、聴衆にとって大変魅力的だと思います。ブリュッセルはそこに、ヨーロッパの中心というまた別の要素も加わりますので、皆の注目がひととき集まるのは当然でしょう。

★ベルギーは一時期コロナの影響でコンサート、オペラがキャンセルになり、日本とは対応が異なりましたが、コロナ禍を経験することで、クラシック音楽界が何か学んだことはありますか？

コロナの勢いが旺盛な時期(今でも、ヨーロッパも含め、世界中で全面的な解決に至ってはいませんが)、日本では、2020年の2月から7月の半年程度を除いて、まん延防止の発令時は、50%の観客入場制限を設定し活動再開の指針とし、まん延防止時以外の時期では、クラシックの演奏活動など2,000人程度の客席ならば100%の入場許可が下りたことで、ヨーロッパ諸国に比べると比較的、演奏の機会が最低限保障されていました。しかし、一方で海外からの客演奏者、オペラならば海外招聘(しょうへい)歌手には、厳しい制限がかけられていましたので(これも本年6月より解除)、日本人演奏家を軸にした公演が続きました。その様な中でありながら、この時期を通して、やはり生の演奏、歌唱に勝るものはない、という認識が高まったことがこの時期を経験した人々の貴重な体験であり、予定通りのキャストで演奏が組みなかつた場合でも、50%の入場制限がかかった場合でも、聴衆はその感動を求めて劇場、競技場に積極的に集まりました。

去年の半ばごろから次第に制限も緩和されたため、聴衆も段々とコンサート会場に戻りつつあり、満員盛況でのコンサートも増えてきましたが、それでもヨーロッパとの違いは、日本ではまだ演奏を聴く

際にもマスクを着用している点です。その様な中でも熱心な聴衆は、Bravo!!やBravi!!と書かれたボードを広げて、演奏者に声をかけられない分、感動を表してくれています。

★クラシック音楽＝老人向け音楽ではありませんが、最近の若者はクラシック音楽離れが多いと思います。ポップ音楽やロック音楽好きの方たちにどうやってクラシック音楽に触れる機会を提供できるでしょうか？

ポップのお客さんや、ロックのお客さんとクラシックのお客さんを無理に結ぶ必要はないと思います。それよりも、クラシック音楽の聴き方も多様性を帯びてきて、今までのように会場で生の音楽を聴く人、自宅でさまざまな機材・機器で音楽を楽しむ人(このさまざまな機材・機器というのも、急激な進歩を遂げているので、信じられない程の多様性があります)、時代の分かれた音楽を個別に楽しむ方々、バロック、クラシック、ロマン派、世紀末音楽、20世紀初頭、大戦間の音楽、大戦後の音楽、洋の東西の文化が巧妙に合わさっている音楽、iPhoneを使いオーケストラと同時に音響を作り出す音楽などをそれぞれ楽しむ、このように数えきれないほど、それぞれに異なる音楽ファンが存在する現代は、クラシック音楽のファンが少なくなってきた、という《一昔前》の言い方はできない時代だと考えます。そこで、それらを統合し、いろいろな層に訴えかけて、コンサート会場やオペラハウスに人を呼び込むことができるような仕掛けを、作り手である音楽家が知恵を絞って考え出すことがとても重要だと考えています。

★お仕事以外で、ベルギーに期待するのは何でしょうか？

食事、散歩、ヨーロッパの中心であるがゆえのマルチカルチャーの楽しみ、ブリュッセルだからこそこできるいろいろな人との出会いです。

大野和士氏のコンサート情報は、プチポワ7月号(当号)10ページの音楽情報ページをご覧ください。

写真：©Herbie Yamaguchi